

特集 2つのブルージャケットに 込められた歴史を紐解く。

豊田青年会議所にあった2つの「ブルージャケット」。

現在では使われていないブルージャケットですが、いまでもその当時の想いは現役メンバーへ引き継がれています。そこで今回の特集では、この2つのブルージャケットに関係する先輩たちにインタビューさせていただき、当時のお話を伺って参りました。

「Blue Jacket」から「LINK」へ

豊田青年会議所には「Blue Jacket」という広報誌があり、広報誌「LINK」を発刊するにあたり、まず「Blue Jacket」を手にとるところからはじめました。(一社)豊田青年会議所事務局には1992年(第328号)から2002年(第411号)までの「Blue Jacket」が保管されており、年度ごとに内容やデザインが違い、非常に工夫が凝らされた出来映えで担当委員会の想いや時代の流れを感じることができました。今回は、2002年度広報委員会委員長を務められた能見直樹先輩に当時の想いを伺いました。

広報委員会 委員長に指名された時はどんな気持ちでしたか。

能見 自分自身、JCで広報の経験が全くなかったものですから正直不安でした。新聞に携わる職業だから指名されたのかなと思いました。

広報委員会 委員長を受けるにあたり、どんなことから取りかかりましたか。

能見 まずは委員会メンバーと一緒に、これまでに発刊された広報誌「Blue Jacket」の調査・研究に取りかかりました。それから、自分のカメラを購入しました。

広報に特化する委員会になった理由はあったのですか。

能見 例年は広報業務と渉外業務を担当する広報渉外委員会になるところでしたが、時の第43代芳賀理事長の「広報に力を入れていきたい」という思いから広報委員会が誕生しました。理由の一つとしては、インターネットの普及に伴いホームページの重要性が増してきたという時代背景がありました。

広報誌の編集にあたり、注力されたことを教えてください。

能見 まずは、見やすさ読みやすさです。文字の大きさや写真の配置など毎月試行錯誤を繰り返しながら作り上げてきました。委員会メンバー一丸となって編集した広報誌が印刷され、手に取って見た時は何とも言えない充実感を味わいました。毎月いろいろな意見をもらいながら「次号はより良いものを」という想いで計7回(第405号～第411号)発刊しました。



能見 直樹 先輩 (有)能見新聞店 代表
2002年…広報委員会委員長
2004年…副理事長

2002年度の広報誌において、どんなことにこだわられましたか。

能見 まずは表紙です。豊田青年会議所は2001年に40周年を迎え、新たに50周年を目指した1年目でした。そこで毎号の表紙には長い歴史を経て「時の流れ」を表現することができる写真を掲載しました。第411号では鳥取砂丘に傾いたグラスで表現しています。これは実際に自分自身が撮影した写真です。また、広報誌のタイトルを「Blue Jacket」から「ぶるーじゃけっと」へと平仮名表記に変更しました。

能見先輩にとって最も想い入れの強い広報誌は第何号ですか。

能見 やはり2002年の締めくくりとして発刊した第411号です。一年間の委員会活動の集大成として全てを注ぎ込みました。僕自身だけでなく委員会メンバーにとっても特別な号になったのではないのでしょうか。

最後に本年度より発刊している広報誌「LINK」について一言お願いします。

能見 よく作り込まれていて内容も充実していると感じます。なによりフルカラーで見やすい。これからも紙媒体ならではの「活字の力」を十分に発揮した広報誌になることを期待しながら、毎号を楽しみにしています。

取材にご協力いただきました能見先輩、ありがとうございました。



【写真】「ぶるーじゃけっと」第411号を持つ能見直樹先輩と
広報誌「LINK」創刊号を持つ広報渉外委員会・鈴木健太郎委員長

過去のブルージャケット表紙



NO.335号(1992年) NO.360号(1995年) NO.380号(1997年)

「ブルージャケット」から「ブルーベスト」へ

広報誌「Blue Jacket」のタイトルはブルージャケットという水色のジャケットに由来しています。この度、実際のブルージャケットを能見先輩よりお借りすることができました。

さらに、2004年度 第45代理事長 市川善英先輩をご紹介くださりまして、ブルージャケットについてお話を伺うことができました。

どのような場面でブルージャケットを着用していたのでしょうか。

市川 例会や総会など豊田青年会議所の公式行事において着用し、それが正装でした。あくまでも青年会議所の活動中だけ着用し、それが終われば各自のジャケットに着替えるというスタイルでした。広報誌「Blue Jacket」にもブルージャケットに身を包んだメンバー達が掲載されていますよね。

ブルージャケットには、どのくらいの歴史があるのでしょうか。

市川 1981年、豊田青年会議所の20周年を記念して、メンバーの統一ジャケットを作成したことから、ブルージャケットの歴史は始まり、翌年以降も新しく入会したメンバーが新調することで脈々と継続されてきました。

市川先輩は理事長在任時、ブルージャケットのターニングポイントを迎えられましたが、どのような想いをお持ちだったのでしょうか。

市川 ブルージャケットは1981年に始まり20年以上続いてきました。確かにメンバー同士の一体感を得ることができるなどのメリットはありましたが、2000年代に入り青年会議所活動が対外的な方向にシフトしつつある中で、メンバーだけが統一ジャケットを着用している姿が少しずつ時代にそぐわなくなってきたと感じるようになりました。そこで総会において「2004年は一旦やめてみますが、必要であれば2005年以降いつでも復活させてください」という提案をしました。

現在では対外事業において、メンバー統一の水色のLOMベストを着用し設営にあたっています。他にもハッピーや旗などに水色が継承されています。

市川 それは良いですね。機能的であり使うことができる機会が多そうです。あえてブルージャケットの色である水色を採用していることに感動しました。

最後に広報誌「LINK」について一言お願いいたします。

市川 広報誌「Blue Jacket」は2002年をもって終了しました。これは会員数の減少による予算面での理由とインターネット環境の普及によります。あれから10年以上が経ち様々なSNSが発達してきた時代背景の中で、あえて広報誌を復活させたことが素晴らしい。OBである私たち特別会員が現役の皆さんの活動を知る機会、広報誌が一番適していると思います。これからも広報誌「LINK」を楽しみにしています。



「2002年の広報誌「ブルージャケット」より」
メンバー全員がブルージャケットを着用
現在のLOMベスト



市川 善英 先輩 (株)市川塗工店・代表取締役 45代理事長(2004年)

55周年からその先へ!

先日開催されました3月度例会にて今後の(一社)豊田青年会議所の進むべき道が示され、スローガンと行動指針が豊田JCアカデミー創造会議より発表されました。合わせて、我々が今まで作り上げたプログラムをプログラムショーケースとして土曜授業等で活用できるようにまとめ、地域の方から依頼があれば、授業を行って参ります。

「スローガン」

LOVE RAPPORT TOYOTA CITY
～人が輝き、魅力あふれるまちへ～

「活動指針」

○誇りあるところ ○力強い次世代 ○安全・安心なまちの創造
すべては未来の豊田のために

「プログラムショーケース」

○防災プレパプログラム ○チャレンジタグラグビープログラム ○真の日本人プログラム

◀新たなロゴマーク